

いろいろな人がゆるやかに関わり、互いに支えあえる地域を

NPO法人しやり

13年前「遊びの出前しやり」という北国分のグループが、ユニバーサルキャンプを開いた。ユニバーサルキャンプとは、年齢や障がいの有無に関係なく一緒に参加するキャンプのことである。いまでもあまり知られていないが、当時のしやりのメンバーもそんな言葉は知らなかった。発達障害児を持つ母親から、「自分の子どもが参加できるキャンプがないので開いてくれないか」と言われて、やってみることにしたのである。「しやり」は、1999

年12月に佐藤美江さんら4名によって設立された。4名はともに、子どもと一緒に遊びやキャンプをやる地のサンシャインクラブに若手ボランティアスタッフとして活動をしていた。そのうち近隣の小学校や子供会から遊びの出前に来て欲しいというオファーが増えたので、自分たちの団体を立ち上げることにしたのだ。「しやり」は「お寿司のネタのように、いろいろな（遊び、イベントなどの）ネタを届ける」という意味を込めた命名だ。そこに舞

い込んできたのが冒頭のキャンプの話だった。佐藤さんたちは、キャンプを通して「障がいのある子どもが仲良くなつてほしい」と思った。そのための仕掛けも考えた。また、発達障害児をもつ保護者には「キャンプ中は、うちの子がご迷惑をおかけしてすみませんといわないで欲しい」と伝えた。子どもならどんな子でも迷惑をかけるのが当たり前だからだ。でも、回を重ねることに、わずか2泊3日で仲良くなったり、子どもが変わるなんてことはないとわかってきた。佐藤さんは、「まずは一緒にキャンプができただけでOK。来年また少し仲良

くなってくればいい。社会人になった時に、あんな子がキャンプに来てたなど思い出してくれるだけでもいいんじゃないか」と思うようになった。

同時に、もっと日常的に発達障害児とそうでない子が接する機会を増やしたいという思いも高まつてきた。そこで、3年前に完全民間運営の学童保育所を始めた。現在、毎日ここに来るのは11名ほど、週に何度かは発達障害の子どもも来る。いずれは20名くらいまでには増やしたいと思っている。

学童やキャンプのスタッフには、退職した校長先生や教頭先生、臨床心理士もいるが、しやりが重視して

いすかわネット

いすかわネット



学童保育のようす



しやり設立メンバーの佐藤美江さん

いるのは、地元のおじちゃんやおばちゃん存在だ。発達障害児に接するのだから、専門的な教育や知識を持ったスタッフが対応すべきだという考え方はある。しかし、いろいろな子どもたちが成長し、生きていく地元に住んでいる普通のおじさんやおばさんが彼らに接しながら、その人なりに

子どもを受け止め、理解し、少しだけでも変わっていく。そして例えば、どこかでずれ違ったり、何かで困っている時にひとこと声を掛けられる、そういう関係を作ることが重要だと考えた。それは、障害の有無のことだけでない。例えば、学童に来ている子どもたちは、やがて思春期を迎えて悩ん

だり、人生の中の大きな選択を迫られるような時期がくる。そうした時期に、「親ではない大人との関係」があることが大切だと佐藤さんは考える。「親には相談できないことも、異年齢の大人となら話せることがある。そういう人がいることで助けられることもある。子育てでもそういう人達と一緒に育ててもらえることが子どもにとっても親にとってもすごくいいと思うんです」。

佐藤さん自身、北国分で生まれ、「親じゃないけれど親みたいな人たち、親以上に仲の良かったおじさんやおばさんに育てられた」という思いがある。結婚して子どもを産んでどこに住もうか考えた時、やっぱり北国分がいいと選んだのは、そういう関係を経験していたからだ。そして、自分もまたそういう「地元のおじさんやおばさんになる」年齢になった。「学童の場所にいろんな人たちがランダムに来て、ランダムにつながって、最終的に支えあえるような関係をゆるく作っていきたいんです」。

(NPO法人 しやり ☎ 7017852)